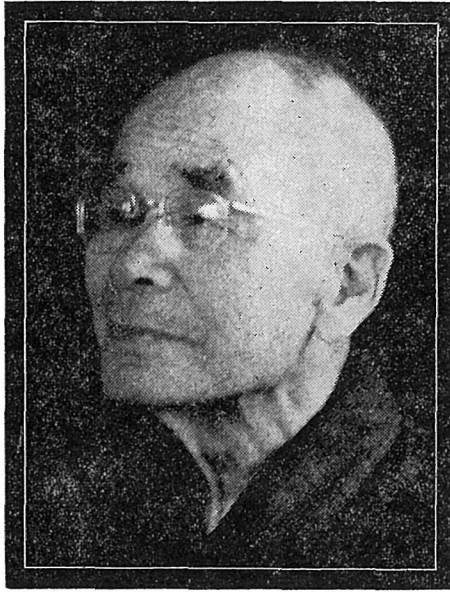


鈴木大拙先生を偲ぶ



略 歴

- 明治三年 十月十八日、金沢市本多町に生る
- 明治二十年 二月、石川専門学校初等中学校を卒業
東京専門学校に学び、後に東京帝国大学選科へ入学
- 明治二十四年 学
- 明治二十六年 明治二十六年 学
- 明治三十年 再渡米 ポール・ケラーズのもとにあり、シカゴ郊外オーブン・コート出版社の雑誌編集にたずさわる
- 明治四十二年 帰国、八月、学習院講師 十月、東京帝国大学文学部文学科教授となる
- 明治四十三年 五月、大谷大学教授、イースタン・ブディスト・ソサエティ(東方仏教徒協会)を設立
- 昭和八年 「楞伽経の研究」によって文学博士の学位取得
- 昭和十一年 外務省嘱託交換教授としてイギリス語大学にて講義をなす
- 昭和二十一年 財団法人松ヶ岡文庫を設立
- 昭和二十四年 一月、日本学士院会員となる
- 昭和二十六年より三十二年まで コロンビア大学哲学科客員教授として講義 その間欧米各地の大学にて仏教哲学を講演する
- 昭和三十年 朝日文化賞を受く
- 昭和三十五年 十月、大谷大学名誉教授に任ぜらる
- 昭和四十一年 七月十二日、逝去。法名、也風流庵大拙居士

大拙先生の

業績についておもう

山口 益

の記念会が先生に献呈致しました論文集「仏教と文化」の序において、私は、およそ先生が大谷大学へ就任せられた以後の、内外に亘る業績に関して、先生を頌える辞を一応述べたことであります。従って、その同じ私が、今追憶の辞を述べると致しましたも、記念論文集の序で述べたものと大差のないことなるのではないかと存じます。

鈴木大拙先生が、大変な御高齢ではありましたが、御存命中の最後まで、宗教談義ということになりますと、なかなか高邁な見解を吐露せられまして、壮者をも凌ぐ気魄に充ち溢れられていたことは驚異そのものでありまして。旁々先生が急逝せられたことは、学界、仏教界にとりまして、まことに巨星地に墜つるの感を与えたことでありました。この学士院の会員の方々の間にありましては、鈴木先生の宗教的経験の世界に深く親しんでいられる方々もあると存じますが、不肖私に追憶の辞を述べるような御示命がありましたのは、私が先生との個人的な関係にあったという点によるのであらうと存じます。個人的な関係と申しますのは、鈴木先生が、私の恩師、佐々木月樵先生の懇願により、また西田幾多郎先生の御勧めによって、大正一〇年に大谷大学の教授として来任せられ、以降、三〇数年に亘って大谷大学教授として在職せられました。その期間に、不肖私も、先生の担当せられた学科の関連学科を担当することになりました。先生が九〇歳を迎えられた年次に、先生への頌寿記念会が大谷大学に於いて計画せられ、私とその記念会の代表者の役を勤めたというに由来することと存じます。旁々、そ

と申しましても先生が九〇歳を迎えられた昭和三五年以後におきましても、周知の如く、先生におかれましては、禅選集など叢書の刊行があり、殊に、定期に刊行せられる雑誌などの上にも、或いは自ら執筆せられ、或いは対談の形でその談論の発表せられたものがありまして、先生の宗教的思想境地には、たゆみのない展開のあったことが偲はれます。殊に急逝せられる、ちょうど一ヶ月前の六月一三日に、先生の在任せられた松ヶ岡文庫で、在家仏教協会の主催で、先生と、真宗々々の学匠金子大栄先生と、を囲んで行われた対談の記録が在家仏教誌八月号に掲載せられたものなどを読みますと、両巨匠が、禅の立場と真宗の立場とから、夫々、両思想の真髓についての遺取が記録せられてありまして、それはまことに「世紀の仏教対談」ともいへべき観が窺えるのであります。

さて鈴木先生のその禅論議については、今更申す迄もなく、その主要な労作は、一九二七年にその第一巻がロンドンに於て発行せられ、一九三三年、一九三四年と続いて刊行せられた *Essays in Zen Buddhism* 三巻を始め、一九三四年の *An Introduction to Zen Buddhism*、一九三五年の *Manual of Zen Buddhism* など、何れも英文による刊行物によって見られる

ものであります。そして戦争後、昭和二五年から昭和三年に亘る約九年間、アメリカの諸大学における講義・講演によりまして、それらの諸労作の内容が汎るくアメリカを中心とした西洋世界に浸透することになった、ということでありませう。曾て、ライシユアワー前駐日大使が、ハーヴァード大学の東洋学部を管掌していられた時期に、京都での中国学者たちの集りでの話柄の中にも、鈴木先生の禪論がアメリカでベストセラーとなり、縮刷版の文庫本となって広く読まれていることが話材になっておりました。東大の中村元教授の、「アメリカにおける鈴木大拙博士」という文章によりまして、鈴木先生は、東洋の精神文化を西洋に伝えた偉大な人物として仰がれていられ、先生の功績によって、禪の問答とか公案とか「さとり」などという日本語が、一般英語辞典の中におさめられているに到っている、とのことでありませう。すなわち、英文禪論を基盤とする先生の業績によって、先生は、「東洋精神の象徴的存在」と仰がれていくというのであります。

報道関係の人たちによって、近頃頻りに「日本における禅ブーム」の醗酵されていることが噂されますが、久しく衰頹の一路を辿って来た日本仏教界に、そういう活気が幾分でも見られることになったということは、他の文化的な事々の上にも見られますように、禅風が一度西洋世界を通り、西廻りをして来たことによるのかも知れませう。そういうことであるとすればそれは偏へに鈴木先生の功績に由るといふことの他はありませぬ。

但ししかし、先生の禪論議は、禅宗宗義の宣揚ということに偏

するものではないのであります。先生における禅は、英文著作の上にいわれる如く Zen Buddhism 禅仏教であります。先生にあつては、禅は、禅宗宗義でなくして仏教でありますから、禅の学問的鮮明に努力せられると同時に、論議は常に、同じく仏教としての「浄土真宗」にも亘られるのであります。これは従来的一般禅匠の方々の上に見られない点でなかつたかと存じます。先生におけるそういう傾向の起りは、先生が、真宗の学林であつた大谷大学へ来任せられる十年前の、明治四三年（一九一〇）に、佐々木月樵先生と真宗教義を英訳していられるという事歴の上ですでに具体的に見られるものであります。その佐々木月樵先生の上に、*Studies of Shin Buddhism* なる英文刊行物が、後大正一四年に岩波書店を発売所として刊行せられておりますのは、明治四四年の鈴木先生との協同労作の真宗教義の英訳という仕事で、後、佐々木先生の名において完成せられたものに相違ありません。そして真宗の学匠であられたその佐々木先生も、「真宗教義の研究」といわずに、「*Studies of Shin Buddhism* 真仏教の諸研究」といわれた処に、Zen Buddhism といわれた鈴木先生と肝胆相照す仏教観があつたのでありませう。

現在西ヨーロッパにおいて驚異的な仏教研究の業績をあらわしているベルギー・ルヴヴァーン大学の Etienne Lamotte 教授は、鈴木、佐々木両先生の用いられる禅仏教、真仏教という *term* を用いるのでありますが、両先生の仏教観を表示する用語が、そのように西ヨーロッパの学者によつても用いられていることは、注意すべきことであらうと存じます。

ところで鈴木先生の浄土真宗についての関心は、佐々木先生との協同労作としての真宗教義の英訳に始まって、昭和一七年には、「浄土系思想論」という先生独自の浄土教観の体系が公刊せられました。その浄土教観において、先生は、浄土の信心を、ひとえに仏心宗的すなわち禅の証悟的な立場で規定しようとしていられます。それは信心の証悟的な絶対性を強調される立場であります。尤もそのような立場が進められていられましたが、昭和二七年夏季休暇に先生がアメリカから帰られたときの大谷大学での講演においては、「浄土真宗が宗教としての完成形態である」と言い切っていられた言葉がありました。そして、そういう心境を経て、先生は遂に近年に至って、真宗教義の大綱である親鸞の教行信証六巻の英訳と、親鸞聖人七百年忌法要の記念事業として東本願寺当事者の切なる願望に呼応して着手せられたものではあります。誰もが難事業であるとしているこの筆を、すでに米寿を超えられた先生があえて引承せられたということは、先生によれば、すべてのものごとを世界的な立場に立つて行わねばならないとする信念に貫ぬかれています。昭和三〇年に、先生の門弟の一人、杉平顕智氏によつて、先生の英文著作から日本語せられた「華嚴の研究」の序文の中に強く語られているのであります。恐らくそういう信念で着手せられたとおもわれる教行信証英訳の事業は、教行信証六巻の終りの真仏土、化身土という二巻を除いて、すでに、殆ど完璧な英文原稿となっているのであります。終り二巻の英訳が

未完の儘であることは遺憾の限りではありませんが、すでに殆ど完成している先立つ四巻の出版は、その事業を先生に懇望した東本願寺の当事者によって、先生の遺稿出版として完了されねばならぬのでありましょう。

先生がそういう事情下にあられた勢でもあり、また先生を景仰する方々が先生における浄土教観を承わりたいという絶えざる要請の故でも、あったのでありましょう。先生を囲んでの対談として、本年になって、二度も浄土真宗の基本課題である「本願」ということを題にした対談が取り行われたことでありました。その最後のものが、先刻も一言した金子大栄先生との対談であったのであります。ただそれらの場合にあつての先生の態度は、先の「浄土系思想論」の上に、その骨子のすでにあらわれていた、「禪者としての本願の理解」であつたことは申す迄もありません。そして、それは、そうであつて何等異とすべきでないのであります。それが当然であると思います。尤も只今はそれについて、それ以上立ち入って申すべき余裕はございません。

なお、先生の学績について最後に今一つ、どうしても追憶せねばならぬことは、先生が仏教学に対して、文献学的な方法についての、只ならぬ関心を示してられる点であります。それは先生の禪が禪仏教であり、先刻も申しました如く、すべてを世界的な立場で遂行せねばならぬとせられる信念と一連のものであることは言う迄もありません。そして、そういう方法は、不立文字・以心伝心・教外別伝という禪の伝統を名目通りに遵守される一般の禪者の上には殆ど見られない処でないかと存じ

ます。

さて鈴木先生が、文献学的方法についての関心を寄せられたということについては、先ず杉平頌智氏が、先生の英文著作から日本語として出版した「般若経の哲学と宗教」、及び、先にも一言した「華嚴の研究」を一瞥しただけでも、先生が禪仏教を解釈するに当って、大乘仏教の根源をなす般若経及び華嚴経を、その梵語原典にまで溯源して理解しようと努められた跡の上に見られるのであります。それは先生の仏教研究が、文献学的な基礎に立つことを立証するものでありますが、まさしく、一九三〇—一九三四年、すなわち昭和五年—九年に亘って、ロンドン及び京都で出版せられた入楞伽經の研究、入楞伽經の英訳、及び、その經典の梵本とチベット訳と漢訳との対照索引という三者一連の刊行物、並びに、一九三四—三六年に泉芳環氏との協同労作として校訂出版せられた「梵文華嚴經入法界品」は、現在の仏教研究者たちが重要な文献学上の参考資料とする処でありまして大変な労作であると申さねばなりません。先生がその華嚴經入法界品に入念であったことは、かねて華嚴思想の研究を以て自らの仏教学を発足していられた佐々木月樵先生との交遊の辺から、その源流を發しているのではないかと憶えますが、鈴木先生が企画していられた華嚴經入法界品の英訳という事業は、先生がいつもそのライフワークのようにいつていられた課題であります。従って、先生は、その事業の為に、若い一人の文献学者に依頼して、曾て入楞伽經の為に作製せられたと同じような梵本、チベット訳、及び漢訳諸本の対照索引を作製させていられます。その仕事は開始せられてから数年を

経ておりますが、目下その仕事の途中であります。もって先生の華嚴經入法界品の英訳が云何に遠大な計画のものであったかが察知せられると思います。なお私の携わっていない分野のこととありますが、鈴木先生の要望によって禪語語彙集が編纂されている途中であります。これは、中国の唐時代及び宋時代などの頃に著わされた禪の語録には、中国の俗語が沢山雜っていることとありまして、在来の禪匠方は、それら俗語の雜っている文章を禪經驗の上から、唯、独断的主観的に読解していられたとのことであります。鈴木先生は、この禪の語録が学問的客観的に読解せられねばならない、として、名古屋大学の中国語の専門家である入矢義高教授に依頼して、禪語録中の俗語を、中国語学の立場から、学問的に編纂解説した禪語語彙集が作製中であるのであります。これも、先生が文献学的方法を重要視せられた一面であるのであります。

最後に、先生の発願によって、そして鈴木先生の名に於いて、北京版チベット大藏經影印版の刊行という大事業が完成されたことを申し添えねばなりません。チベット語の仏典が、西欧の学界でとりあげられましたのは前世紀の初頭からでありましたが、チベット仏典の大集成であるチベット大藏經を蔵書として有する近代的な図書館は、西洋諸国でも寥々たるもので、チベット大藏經を閲覧繙読するということは容易でなかったのであります。ところが幸い、巴里の国民図書館と大谷大学図書館とに、殆ど完全な形で取蔵せられる北京版大藏經が、影印版を作製することに最も可能な形態でありますので、巴里の国民図書館の協力を得て、大谷大学図書館所蔵のものを影印版とし、

一六八巻にまとめて刊行することに成功しました。まさしく印刷に着手したのは一九五五年で、全部完了したのは一九六一年であります。その刊行によりましてチベット大蔵経が汎く分布されることになり、チベット仏典の繙訳が容易になり、現在は、チベット訳仏典を描いた仏教学の研究は意味をなさないということが仏教学の通念となったのであります。

鈴木先生は、かつて「一国の文化は最も地味な地下的な事業によって培われてゆくもので、そういう仕事は文化建設の第一段階である」と主張せられたことがありましたが、長い生涯をかけて体現していかれた宗教的信念に基づいて、そういう文化建設をも目指していられた鈴木大拙先生の発願と、その名の下において、その大事業は恙なく完成の域に達したものと存じます。

私は大乘教仏典の文献学的研究という狭い領域の中をつねに彷徨するものでありまして、到底、大拙先生の学績を追憶する用意もないのであります。以上蕪辞を連ねまして、とりあえず大拙先生追憶の辞とします。(昭和四一年九月一二日・日本学士院において)

追 懐

坂 本 弘

われわれはついに先生を失った。当初どうしても受けつけら

れなかったこの事実が、この頃になってようやく退びきならぬ力で胸を締めつけるのである。ここでは本学と先生との因縁を念頭に置いて、思い出の幾つかを断片的に書きとめて、当面の責めを塞ぎたいとおもう。

先生が大正十年佐々木月樵師の徳憑によって本学に赴任されたことは広く知られている。しかしその徳憑とは実際はどういうことであつたのか。

師と先生との間には、その時、すでに十年にあまる親交があつた。新しい地平に立つ仏教者としての自覚・識見・抱負において深く相認めるものがあつた。のみならず、両者の間には真宗聖教の齟齬、紹介という仕事の上の協力も緒についていた。

このようにして両者の間には深い相互の認識と信頼があつた。偶たま、大正八年には、先生にとつて又とない「師であり兄であり友であつた」釈宗演師が他界し、また先生自身當時在職の学習院の進退を考慮するという事情があつた。いわば先生は一つの大きな転機に立っていたのである。佐々木師が建学の抱負と熱情とを傾け先生の協力を懇願したのは、まさしくこのような時機に當っていた。因縁は熟していたのである。このようにして先生は受諾に踏み切られた。先生を動かし先生を踏み切らせたものは、何よりもまず、佐々木師の抱負、熱情への共感、そしてそのすぐれた指導力への信頼であつた。このことは、后数年を出でずして佐々木師が病歿された時の先生の痛ましいばかりの嘆きと落胆によつても知ることができよう。

佐々木師と先生とを固く結びつけた抱負とはいかなるものであつたか。これを今日具体的に知ることができないのは残念で

ある。しかしその基本的、核心的な意思と思われるものは周知の「大谷大学樹立の精神」に、まだ側面的にはあるが、先生赴任の同じ年早くも発足したイースタン・ブディスト協会設立、ならびにその機関誌「イースタン・ブディスト」発刊の辞にはつきり打ち出されている。困みに同協会は、鈴木、佐々木、赤沼、山辺の諸師を同人とし、大乘仏教の海外紹介を主要な事業とし、佐々木、鈴木ビジョン具体化の野心的な一翼を意味するものであった。その発刊の辞には次のような言葉がある。

大乘仏教は、現に生きる信仰たるのみならず、歴史的にみて、人間の魂の偉大なモニュメントである。その苦斗、その憧憬、そしてそのよるこばしい凱歌は、すべてその中に記録されている。してみれば、大乘仏教はひとり東洋の遺産たるにとどまらぬ。それは西洋にもひとしく開放されなければならぬ。

要するに、両師の目指すところは、仏教を人間におけるもっとも根源的な問題がどのように受けとめられ、取り組まれ、解明されたかを記録するドキュメントとしてとらえ、これを広く世界に開放しようとするにであったのである。

ついでながら、同誌はその后約二十年にわたって先生の英文による文筆活動の砦となった。禅入門三部作、禅論文集三巻、禅と日本文化、楞伽経の研究及び英訳等は、すべて、同誌掲載の論文を原型或は核心部として出来上ったものだと云ってよい。

本学赴任后僅か五年にしてやってきた佐々木学長の死は、さ

きにも触れたように、先生にとつて宗演師の死に次ぐ深刻な打撃であった。しかし先生の行くべき途は、つい今述べたように、すでに決まっていた。先生はこの途をたゆみなく最後まで歩みつづけられたのである。昭和五年前後の異安心問題からむ学園騒擾の際も、先生のこの姿勢はいささかも動ずることはなかった。騒擾后しばらく学内は数々の進歩的な学者を失って寂寥の色を濃くした。学生の間には挫折感のおおいがたいものがあった。このような中であつて先生の揺ぎのない姿勢と一途な研究活動とは無言の支えでありまた励ましであつた。

先生は赴任当初般若、禅思想に関する講義の外、主として英語を講じられたが、后哲学科に宗教学講座が設置されるに及んでその講座主任に任じ、以后一貫して変らなかつた。

先生の講義ひいては授業には、さきにも触れた人間の根源的なものをつねに見て行くという志向が一貫して感じられた。「禅」も「真」も、仏教もキリスト教も、つまるところ人間の問題であつた。また人間の問題は、仏教においておそらくその最も深い開発を見る根源的な自覚に突入することなくしては解明されえないものであつた。

先生の講義には、どの時間にも、なにほどこは講案を離れて、想のおもむくままに語り出る部分があつた。話題は宗教、哲学、社会問題、内外の風俗、風物の比較、歴史上の人物の批評から人情の機微、陰翳にまで及んだ。時にはそれは意表を衝いたきびしく鋭利な批評となり、時には暖か味のある惻隱のことばとなつた。偶には嘆息をまじえた眩くような独白となることもあつた。こんな時先生は心持ち横向きになつて窓外を眺め

ていられた。そのいづれにも先生独自の風格がまざまざと感じられた。学生はこのような「脱線」をたのしみにして心持ちにしていたのである。

日中事変発生以後の時勢の推移は先生を憂慮せしめた。戦争の末期に近付くにつれて、学生たちには軍事教練の外、さまざまな「鎮成」や勤勞奉仕が課せられ強化された。学業に対するこれらの比重は大きくなる一方であった。

心身の訓練、勤勞は先生の平素から重視するところであった。「筋肉との関係のないさとりは遊戯的になる」というのは先生の持論であった。しかし問題はそれを導く精神或は心術にある。もしそれが単に戦争遂行のためのみ課せられ、人間の深い靈性的要求と自発的な探求の精神とを抑圧するにいたるならば、その掲げる大義名分にもかかわらず、必ず精神的頹敗を生ずるだろう。先生は教授会においてこの危惧を率直に表明し、あらゆる困難をしのいで学生訓育の根本精神を貫いて行くことを懇えられたことがある。それは配属校校の激昂を買ったが、先生は全く意に介されなかった。

その頃学生たちは、いわゆる学徒出陣で、召集されて一波また一波と戦陣に赴いた。それらの学生たちは教員室へ挨拶に来ると、大抵国旗か何かを持参して教授たちの揮毫を乞うた。とくに先生に揮毫を乞う学生は多かった。先生は大體揮毫は好まない方である。頼まれると、面と向っては断わりにくく、観念して筆を執るといふ風であった。しかし出征する学生のためには快く筆を執られた。こんな時最も好んで書かれたのは「一真実」の三字であった。或る学生は深く一揖して「一真実、一

真実」と呟きながら去った。「皮膚脱落尽、唯有一真実」葉山のこのことばは、亦、先生が出で立つ学徒たちにかけられた祈りでもあったのである。

昭和十四年夏、三十年にわたる好伴侶であり、仕事の上の片腕でもあった夫人を病いに失い、翌年には本学における后継者として信頼する直弟子横川顯正氏を急病に失った先生の身辺は頓に寂寥の色を加えた。この頃の先生の思想や感懐には一段の深みと一種冥想的な翳りが加わってくる。「無心ということ」「禅思想史研究第一、盤珪禅」等はそれを物語っている。

以前にもまして先生はひとの病気に敏感になり、一層心遣いをもつようになられた。専攻の学生などで二、三回続けて欠席する者があると、すぐ病気ではないかと案じられた。病氣中のものがあると、再々その容態を尋ねられた。氣遣わずにはいらなかったのである。

それとともに、先生は、自分の考えるところ、思うところを少しでも多く知らせ理解させておきたいという気持を一層つく持たれるようになった。これは授業からも、われわれとの応接からも滲み出るように感じられた。

昭和十六、十七年にわたって先生は、演習の授業を兼ねて専攻の学生たちが週一回先生のお宅に集まるよう取り計らわれた。授業のあと、自由な談話に移り、先生は学生の乞いに応じて宗教、哲学、文学、芸術、時事等について率直に意見を述べられた。当時はすでに食糧事情が悪く、ことに甘味品の入手は困難であったにもかかわらず、食い盛りの学生たちのため、乏しい蓄えの中から工面して屢々茶菓の心配までして下さった。

「お接待はできないぞ、これきりだぞ」などと云いながら。このように毎週親しく先生を囲んでお話しを聞く会をもつ、などということは、おそらくあとにもさきにもないことであった。

この点、当時の専攻学生は特に恵まれていたと云わねばならぬ。

戦后鎌倉に住まわれるようになられてからも、先生は殆ど毎年請いに応じて来学し、公開講演に或は集中講義にその所見を吐露された。将来仏教の担い手となるべき学生たちにはできるだけ思うところを話しておきたい、とは来学の都度洩らされた感想である。

このようにして四十五年前佐々木月樵師との間に深い一致を見た学生訓育への熱情は最後まで燃焼を続けた。世界の禪者鈴木大拙は、亦、最後まで本学の鈴木大拙であったのである。

著作論文目録 (大谷大学関係誌)

『大谷学報』 (大谷学会刊)

六祖法宝壇経につきて	第3巻第1号	大正2年
達磨と楞伽経	第3巻第4号	大正11年
禅学思想史上巻につきて	第5巻第2号	大正13年
ジャバの仏教に就いて <small>(ラバートン述、鈴木訳)</small>	第6巻第1号	大正14年
禁欲主義と人間性	第7巻第4号	大正15年
「歎異鈔」を読む	第9巻第1号	昭和3年
報身観の宗教的心理学基礎	第9巻第4号	昭和3年
「楞伽師資記」とその内容概観	第12巻第3号	昭和6年
達摩観心論(破相論)四本対校上	第15巻第4号	昭和9年

達摩観心論(破相論)四本対校下	第16巻第2号	昭和10年
龍谷大学附属図書館蔵敦煌本「菩提達摩観門法大乘法論」殊に其中の「宗修心要論」に就きて	第16巻第1号	昭和10年
土社会和尚の壇語と考ふべき敦煌出土本につきて	第16巻第4号	昭和10年
六祖壇経に關する二、三の意見	第19巻第1号	昭和13年
真宗管見(上)	第23巻第1号	昭和16年
真宗管見(下)	第23巻第2号	昭和16年
大乘仏教の世界的使命	第24巻第3号	昭和18年
靈性的自覚の日本の形成	第26巻第1,2号	昭和21年
渡米にあたりて	第29巻第1号	昭和24年

『大谷大学研究年報』 (大谷学会刊)

仏教生活と受動性	第1集	昭和17年
----------	-----	-------

『宗教学年報』 (大谷大学宗教学会刊)

禪と神秘思想	第1号	昭和25年
--------	-----	-------

『親鸞教学』 (大谷大学真宗学会刊)

わが真宗観(一)	第2号	昭和38年
清沢満之は生きている	第3号	昭和38年
わが真宗観(二)	第4号	昭和39年
真宗概論(一)	第5号	昭和39年
真宗概論(二)	第6号	昭和40年
真宗概論(三)	第7号	昭和40年
キリスト教と仏教	第8号	昭和41年

“Eastern Buddhist” (Eastern Buddhist Society)
 Zen Buddhism as Purifier and Liberation of Life.
 (Vol. 1, No. 1, 1921)

- The Avatamsaka Sutra, epitomized, Pt. 1-4.
(Vol. 1, No. 1-4, 1921)
- The Buddha in Mahayana Buddhism.
(Vol. 1, No. 2, 1921)
- The Revelation of a New Truth in Zen Buddhism.
(Vol. 1, No. 3, 1921)
- Notes on the Avatamsaka Sutra.
(Vol. 1, No. 3, 1921)
- Why do We Fight?
(Vol. 1, No. 4, 1921)
- Some Aspects of Zen Buddhism.
(Vol. 1, Nos. 5-6, 1922)
- The Meditation Hall and Ideals of the Monkish Discipline.
(Vol. 2, Nos. 1-2, 1922)
- The Psychological School of Mahayana Buddhism.
(Vol. 2, Nos. 3-4, 1923)
- The Ten Cow-Herding Pictures.
(Vol. 2, Nos. 3-4, 1923)
- The Life of Shinran Shonin, by Kakunyo Shonin.
Tr. by D. T. Suzuki. (Vol. 2, No. 5, 1923)
- Zen Buddhism as Chinese Interpretation of the Doctrine of Enlightenment. (Vol. 2, No. 6, 1923)
- Enlightenment and Ignorance. (Vol. 3, No. 1, 1924)
- Sayings of a Modern Tariki Mystic.
(Vol. 3, No. 2, 1924)
- Zen Buddhism on Immorality: Extract fr. "The Hekiganshu", tr, by D. T. Suzuki.
(Vol. 3, No. 3, 1924-25)
- The Development of the Pure Land Doctrine in Buddhism.
(Vol. 3, No. 4, 1925)
- The Secret Message of Bodhi-Dharma, or the Content of Zen Buddhism.
(Vol. 4, No. 1, 1926)
- Zen and Jodo, Two Types of Buddhist Experience.
(Vol. 4, No. 2, 1927)
- The Lankavatara Sutra, as a Mahayana Text in Especial Relation to the Teaching of Zen Buddhism.
(Vol. 4, Nos. 3-4, 1927-28)
- An Introduction to the Study of the Lankavatara Sutra.
(Vol. 5, No. 1, 1929)
- Passivity in the Buddhist Life. (Vol. 5, Nos. 2-3, 1930)
- What is Zen?
(Vol. 5, No. 4, 1931)
- Mahayana and Hinayana Buddhism, or the Bodhi-sattva-ideal and the Sravaka-ideal, as Distinguished in the Opening Chapter of the Gandavyuha.
(Vol. 4, No. 1, 1932)
- Buddhist, Especially Zen contributions, to Japanese Culture.
(Vol. 6, No. 2, 1933)
- Gensha on Three Invalids. (Vol. 6, No. 3, 1934)
- Impressions of Chinese Buddhism.
(Vol. 6, No. 4, 1935)
- Zen and the Japanese Love of Nature.
(Vol. 7, No. 1, 1939)
- Tract on Steadily Holding to [the Faith] (執持妙)
Tr. by D. T. Suzuki
(Vol. 7, Nos. 3-4, 1939)
- Buddhism and Education. (Vol. 8, No. 1, 1949)
- The Myokomin (妙好人) (Vol. 8, No. 2, 1951)
- On the Hekigan Roku ("The Blue Cliff Records") with a Translation of "Case One"
(New Series; Vol. 1, No. 1, 1965)